屋城にも赴いたのだが、名護屋城に着いたとたんに俄雨が降りだし、そして名護屋城博物館は耐震工事のために臨時休館となっており、案内をしてくれた友人と私以外、誰もいなかった。ゆっくりと名護屋城跡を巡ろうと思っていた私は、その展開に、ある奇妙な思いを抱いた。

# 「日本を観る」から「日本を感じる」へ

韓　男洙
（漢陽大学校）

1月9日、私は初めて日本の横浜市神奈川大学にある非文字資料研究センターを訪れていた。その日の午後は、宿舎にスーツケースを置いてすぐにセンターの資料室へと向かった。資料で埋め尽くされたその部屋から醸し出される独特な香りと、収集された資料の保管方法は、そこを訪れる者に一種の目新しさと驚きを感じさせるものだった。私の中で、これこそ文字に非ざる資料を扱う研究センターの学術的な態度と性格とを示すものであるという感覚がひしひしと湧き上がってきた。これら資料室に納められた韓国や中国、そして日本に関する豊富な民俗資料を目の前にして、それまでの疲れも一気に吹き飛んでしまうほどだった。

私はこれまでに3度、日本を訪れたことがある。いずれも、調査を主目的としたものだったが、今回は初の一人での渡日となった。可能な限り多くのものを見てみたいという思いから、滞在スケジュールはタイトに組むことにした。そのため、日本でのフィールドワークを進めるうちに、自分の体力不足を痛感させられることになった。一方で、まったく馴染みのない土地へ行き、きわめて新鮮な事柄に触れることができたことで、毎回、疲れが一瞬で吹き飛んでしまうような心持ちになった。今回の滞在で、私は12カ所に及ぶ場所を訪れ、日本各地の民俗文化を体験することができた。ここに、その内訳を列挙してみよう。電車に乗り、都会のど真ん中や市場まで出かけたり、村に暮らす日本人のもとを訪ねたりしたほか、博物館や画廊、オペラや伝統的な演劇を見学したり、公園や神社を訪れたりすることもあった。ほかには、大磯の左義長（以前は神社で行われていたとされる厄払いの儀礼）や三浦のチャッキラコ（幼い子供たちの踊り。子供たちは鈴と稲穂をつけた竹を手に持って舞う）を見学する機会にも恵まれ、さらには名古屋まで足を延ばして日本独楽博物館を訪問することもあった。これらの地で目にした様々な情景は、私の頭と心の中にしっかりと刻み込まれている。だが、何よりも重要なのは、私の中で起こった「日本を観る」から「日本を感じる」へという感覚の変化だった。日本に来て触れた忘れがたい情景と雰囲気が、自ずと日本を受け入れ、そこから何かを感じ取るという方向へと、日本に不慣れな一人の観光客だった私を導いてくれたのだろう。

國學院大学は、私が今回調査のために訪れた一つ目の場所だった。ここでは、江戸時代の神社がどのようなものであったのか、その形式を一目で理解することができた。とりわけ、樹木の葉の形をした祭祀儀礼用の杯はきわめて精巧かつ精緻に作られており、それは神社の祭祀儀礼が定められた類型と式次第、規模といったものに基づいて行われていることを伺わせるに足るものであった。また、祭祀儀礼に用いられる白い冊子は「浄化」を象徴するもののようで、別の機会に訪れたいくつかの祭祀の中でもその意味を再確認することになった。

今回の調査で特に印象深かったものとして、天候と人々の姿を挙げることができるだろう。天候といえば、大磯で行われた左義長に触れぬわけにはいかない。1月14日は、大雪の降った日である。私は朝の10時には現地に到着したのだが、すでに強風とかなりの量の雪が降っていた。問題は、強い風のせいで足を一歩前に踏み出すのも困難なことだった。わずか200メートルばかりの短い距離を歩くのに、1時間余りの時間を費やしたような気がするほどだった。こうして、やっとの思いで海岸へと向かい、そこに設けられた9つのサイト（ワラでできた山。この中には旧年中に使っていた神棚のかざりやだるまが詰め込まれている）を目にすることができたのだ。砂浜を一歩一歩進むうち、しばらくすると例えようのない不気味な恐怖感が私を襲い始めた。今までにこのような天候の中でフィールドワークをしたことなどあるはずもなく、緊張から全身が強張っていくのがわかった。しかし、そこで前に進むのをやめたら、ぬかるんだ

砂に足を取られて起き上がれなくなってしまうだろうと思い、迫りくる風に耐えながらどうにか写真を撮り終えた。サイトの火入れは夜の７時から…。それまで８時間以上をどこか別の場所で潰さねばならなかった。びしょ濡れの服と靴に体は冷え切り、凍えて氷像にでもなってしまいそうだった。私は喫茶店と食堂を探し、そこで濡れた服を乾かして冷えた体を温め、サイトの火入れが始まるのを待つことにした。大雪で電車が運行しているかどうかもわからなかった。それ以上に不安だったのは、サイトに火を入れ、その火で団子を焼く人々の姿を見ることができるかどうかまったく予想がつかないことだった。しかし、時間通り７時になると、サイトの火入れが始まった。それまでの不安と凍てつく寒さが、一瞬のうちに煙の中へと消えて行くようだった。サイトを燃やす左義長に続いて、綱引きや海中での遊泳、厄払いの儀礼が行われ、歌も捧げられた。海岸では多くの人が団子を火に翳して焼き、それを分け合って食べていた。皆、顔に微笑みを浮かべながら、長い長い一日を終えたのだった。こうした時間の中で垣間見ることのできた人々の強い愛情や友情、そして故郷に対する思いといったものは、私の心にも深く刻み込まれることになった。この左義長とは、新たな年を迎えるために行われるもので、人々はありとあらゆる怖れと不吉なものを炎の中に込めて燃やし、新年の到来を待つのである。

日本で二番目に訪れたのは、名古屋にある日本独楽博物館だった。新幹線での移動となったが、そのスピードに圧倒された。窓からは、富士山を眺めることもできた。名古屋港近くにある建物の２階が、私立博物館となっていた。私たちがそこを訪れた時、館長は真剣な面持ちで子供たちに様々な遊びの方法を教えている最中で、大きな声を張り上げながら説明をしているところだった。

博物館の中には、凧や独楽、空中独楽など 10 万点近くの収蔵品が所狭しと並べられていた。そこには、中国や台湾、ヨーロッパ、オーストラリアの空中独楽などが揃えられており、「輪鼓」と呼ばれる日本の空中独楽までもが展示されていた。午後の１時半になって手が空くと、館長は昼食を摂りながら私たちに自らがこれまでに歩んできた半生について語ってくださった。

午後３時になると、館長は再び子供たちに遊びを披露して見せるために食堂を後にした。話を伺うことのできた時間は短かったのだが、館長の語りからは、子供たちに対する彼の愛情と信頼とが伝わってきた。彼は、子供たちに健康で自信に満ちあふれた生活を送ってほしいと願っているという。彼によれば、遊びとは失敗を繰り返し、失敗を通して自信を取り戻すという過程にほかならない。これこそが、遊びのもつ力なのである。

こうした館長の眼差しからは、文明によって失われてしまった子供たちの想像力と、幼い心から生まれる意志や信念といったものを守り続けていきたいという彼の想いを読み取ることができる。この想いのために、彼は博物館という小さな空間の中で近所の子供たちと遊びに興じるのだ。彼が子供たちと遊ぶ様子を見ながら、私の心にも幼い頃の思い出が蘇り、悲しみにも似た気持ちが湧き上がってくるようだった。70 歳と高齢の館長が自ら遊びを企画し、顔をほころばせながら子供たちと遊ぶ様子には、本当に頭が下がる思いだった。

今回の訪問期間は決して長いものではなかったが、私に多くのことを経験できるよう配慮してくださった非文字資料研究センターのスタッフと、指導を引き受けてくださった先生方に心より感謝を申し上げたい。次の機会に日本を訪れる際には、外国からの「お客様」などではなくなっていたいと願いながら。

# 日本で陶芸を学んでいる、または陶芸に従事している外国人

Liliana Granja Pereira de Morais
（サンパウロ大学）

本研究の目的は、日本で陶芸を学んでいる、または陶芸に従事している外国人を探してインタビューし、彼らの談話の中から日本文化が陶芸を通じてどのように表されているかを理解することであった。故郷を離れ日本で陶芸の道に進もうと思った動機を理解するため、私は外国人陶芸家たちのライフストーリーに関心を持った。また、日本のスタイル、技術、さらには日本人のものづくりに対する精神が、どのように彼らの陶芸作品に影響を及ぼしているかについても知りたかった。これらの目的を達成するため、ライフストーリーのエスノ社会学的手